

〔常山紀談三〕三好家滅し時、料理庖丁の上手と聞えし坪内何がしといへる者、生どりとなりしが、放し囚にして有しに、年經て後、菅谷九右衛門に賄申ける市原五右衛門、坪内は鶴鯉の庖丁は云にも及ばず、七五三の饗膳の儀式よく亥れる者なり、其上子ども兩人は既に奉公申候へば、ゆるされ候て、厨の事を司らせ申さんといひけるを、信長聞きて、明朝の料理させよ、其の鹽梅によらんとなりしかば、則坪内をして膳を出させけるを、信長食して、水くさくしてくはれざるよ、それ誅せよと怒られしかば、坪内、畏承候、今一度仕らん、それにも御心に應せずば腹切んといへば、信長許容せられけり、さてその翌日膳を出しけるに、味のうまき事殊の外によかりければ、信長悦て、祿あたへられけり、坪内、辱き由申して、さて昨日の鹽梅は三好家の風なり、けさの鹽梅は第三番の鹽梅なり、三好家は長輝より五代公方家の事をとり、日本國の政をとりはからひぬれば、何事もいやしからず、其好む所第一等の鹽梅を昨日奉りければ、いやしみ給ふ事ことわりなり、けさの風味は、野鄙なるゐなか風にて候へば、御心に入たるなりといひければ、聞人信長に恥辱をあたへたる坪内が詞也といひあへり。

〔續視聽草八集三〕庖丁上覽

家康公或とき御船にて被爲成、御船中御目通りにて御臺所方天。野。五。郎。太。夫。活鯉を料理庖丁仕候とき、鯉はね上り船外へ飛出候を、五郎太夫さわがす左の手に持候魚箸にて挟とり候、本多佐渡守拵も仕たりと譽て、御前にも御感被遊候半と存じけるに、御不興にていかひわたけものと上意なり、佐渡守一圓了得不仕打過たり、其後或時佐渡守御前に罷出候節、吾は秀忠へ恩を成すと上意なり、時に佐渡守承り仰までもなく、天下を御譲り被遊候上は、是に過たる事何か可有御座と申上る、いやく天下は元より秀忠のものに定りたれば、恩といふにはあらず、總て古より大底に親増ても、外からは左に不思、まして少し劣りたるをば、大に劣りたる様に思ひなすもの